

六來大國
下續為其
西師已
起乙
陽中于
起乙
陽中于
起乙
陽中于

漱石全集
第四卷

草枕
二百十日
野分

全三十四卷 第二回配本

昭和三十一年六月十二日 第一刷發行
昭和三十三年八月五日 第四刷發行

漱石全集 第四卷

定價一五〇圓

著 者

夏 目 漱 石
なつめ そうせき

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
印刷者 山 田 一 雄

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三 株式會社

岩 波 書 店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

草枕

三

二百十日

一八

野分

一八五

解説
注 解

三二九

三四三

草

枕

— 明治三九、九、一 —

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。

どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、書が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。

矢張り向ふ三軒兩隣りにちら／＼する唯の人である。

唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く許りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊といふ。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云へば寫さななくてもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも、瑤鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自から心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに収め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人世を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく清

淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、——千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思ふて居る。——喜びの深きとき憂慙深く、樂みの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片付けやうとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが増えれば寐る間も心配だらう。戀はうれしい、嬉しい戀が積もれば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかる。閣僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。脊中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考がこゝ迄漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなつた。平衡を保つ爲めに、すはやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に卸りた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出した丈で、幸ひと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向ふを見ると、路から左の方にバケツを伏せた様な峯が聳えて居る。杉か檜が分らないが根元から頂き迄悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續ぎ目が確と見えぬ位濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんで、眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然して居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る

難義だ。

土をならす丈なら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。堀崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲めに道を譲る景色はない。向ふで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならぬ。巖のない所でさへ歩るきよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、丸で一間幅を三角に穿つて、其頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより川底を涉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶら／＼と七曲りへかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居た、まれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。の

どかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ氣が濟まんと見える。其上どこ迄も登つて行く、いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂ふて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡に残るのかも知れない。

巖角を鋭どく廻つて、按摩なら眞逆様に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛び上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違ふときにも元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて

正體なくなる。只^{ただ}菜の花を遠く望んだときに眼が醒^さめる。雲雀^{ひばり}の聲を聞いたときに魂^{たましひ}のありか^{はんぜん}判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂^{たましひ}全體が鳴くのだ。魂^{たましひ}の活動が聲にあらはれたものうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ち^{たちま}シエレー^{*}の雲雀^{ひばり}の詩を思ひ出して、口のうちに覺えた所だけ暗誦^{あんしやう}して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかった。其二三句のなかにこんながある。

We look before and after

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell

of saddest thought.

「前を見ては、後^いへを見ては、物欲^{ものほ}しと、あこがるゝ

かなわれ。腹からの、笑といへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極^{きは}みの歌に、悲しさの、極^{きは}みの想、籠^{おもひ}るとぞ知れ」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀^{ひばり}の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後^{ぜんご}を忘却して、わが喜びを歌ふ譯には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛^{ばんこく}の愁^{うれひ}など、云ふ字がある。詩人だから萬斛^{ばんこく}で素人なら一合^{がふ}で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞^{くらう}性^{しやう}で、凡骨^{ばんこつ}の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあらうが、無量の悲^{かなしみ}も多からう。そんならば詩人になるのも考へ物だ。

しばらくは路^{みち}が平で、右は雜木山^{ざふきやま}、左は菜の花の見つけである。足の下に時々蒲公英^{たんぽぽ}を踏みつける。

鋸^{のこぎり}の様な葉が遠慮なく四方へのはして眞中に黄色^{きいろ}な珠^{たま}を擁護^{ようご}して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄

色な珠は依然として鋸のなかに鎮座して居る。香氣なものだ。又考へをつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍る許りだ。蒲公英も其通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只此景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面を貰つて、開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする了見も起らぬ。只此景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此景色が景色としてのみ、余が心を樂ませつゝあるから苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は是に於

て尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

戀はうつくしかる、孝もうつくしかる、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んで仕舞ふ。従つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲めには、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てば芝居は觀て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を讀んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云ふ

點に存^{ぞん}するかも知れぬが、交^{まじ}らぬ丈^{だけ}に其他の情緒^{じやうしよ}は常よりは餘計に活動するだらう。それが嫌^{いや}だ。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽^あきた。飽き々々した上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞^{こぶ}する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌^{しこ}の純粹なるものも此境^{きやう}を解脫^{げだつ}する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世^{うきよ}の勸工場^{くわんこうば}にあるものだけで用を辨^{べん}じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳^かけあるいて、錢^{ぜに}の勘定を忘れるひまがない。シエレ

一が雲雀^{ひばり}を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌^{しこ}はそこを解脫^{げだつ}したのがある。

*きくをとるとうりのもとというせんとてなんざんをみる。たぎ
採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦

しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに

隣りの娘が覗^{のぞ}いてる譯でもなければ、南山^{なんざん}に親友が奉

職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得

の汗を流し去つた心持ちになれる。獨坐幽篁裏、
*ひとりのうちくわうのうちになし

彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。只二十

字のうちに優^{いう}に別乾坤^{べつけんこん}を建立して居る。此乾坤^{けんこん}の功德

は「不如歸^{ほととぎす}」や「金色夜叉^{こんじきやしゃ}」の功德ではない。汽船、

汽車、權利、義務、道德、禮義で疲れ果てた後、凡て

を忘却してぐつすりと寐込む様な功德である。

*二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的

的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、

詩を讀む人もみんな、西洋人にかぶれて居るから、わ

ざく吞氣な扁舟^{へんしう}を泛^{うか}べて此桃源^{たちげん}に溯^{さかのぼ}るものはない様

だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や
淵明の境界を今の世に布教して廣げやうと云ふ心掛も
何もない。只自分にはかう云ふ感興が演藝會よりも舞
踏會よりも藥になる様に思はれる。フアウストよりも
ハムレットよりも難有く考へられる。かうやつて、只
一人繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ／＼あ
るくのも全く之が爲めである。淵明、王維の詩境を直
接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地
に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情
はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて年が年中南
山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹
藪の中に蚊帳を釣らずに寐た男でもなからう。矢張り
餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ
拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其通り。いくら
雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する

程非人情が募つては居らん。こんな所でも人間に逢ふ。
* じん／＼端折りの頬冠りや、赤い腰卷の姉さんや、時
には人間より顔の長い馬に迄逢ふ。百萬本の檜に取り
圍まれて、海面を抜く何百尺かの空氣を呑んだり吐い
たりしても、人の臭ひは中々取れない。夫れ所か、山
を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の温泉場だ。
唯、物は見様でどうでもなる。* レオナルド、ダ、ビン
チが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つ
だが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人
の女も見様次第で如何様とも見立てがつく。どうせ非
人情をしに出掛けた旅だから、其積りで人間を見たら、
浮世小路の何軒目に狭苦しく暮した時とは違ふだらう。
よし全く人情を離れる事が出来んでも、責めて御能拜
見の時位は淡い心持ちにはなれさうなものだ。能にも
人情はある。* 七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保證
が出来ん。然しあれは情三分藝七分で見せるわざだ。

我等が能から享ける難有味は下界の人情をよく其儘に
寫す手際から出てくるのではない。其儘の上へ藝術と
いふ齋物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な
振舞をするからである。

しばらく此旅中に起る出来事と、旅中に出逢ふ人間
を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだらう。
丸で人情を棄てる譯には行くまいが、根が詩的に出来
た旅だから、非人情のやり序でに、可成節儉してそこ
迄は漕ぎ付けたいものだ。南山や幽篁とは性の違つた
ものに相違ないし、又雲雀や菜の花と一所にする事も
出来まいが、可成之に近づけて、近づけ得る限りは同
じ觀察點から人間を視てみたい。芭蕉と云ふ男は枕元
へ馬が尿するのをさへ雅な事と見立て、發句にした。
余も是から逢ふ人物を——百姓も、町人も、村役場の
書記も、爺さんも婆さんも——悉く大自然の點景とし
て描き出されたものと假定して取こなしに見様。尤も

畫中の人物と違つて、彼等はおのがじ、勝手な眞似を
するだらう。然し普通の小説家の様に其勝手な眞似の
根本を探ぐつて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤
の詮議立てをしては俗になる。動いても構はない。畫
中の人間が動くと思れば差し支ない。畫中の人物はど
う動いても平面以外に出られるものでない。平面以外
に飛び出して、立方的に働くと思へばこそ、此方と衝
突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面
倒になればなる程美的に見て居る譯に行かなくなる。
是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で、
人情の電氣が無暗に双方で起らない様にする。さうす
れば相手がいくら働いても、こちらの懷には容易に飛
び込めない譯だから、つまりは畫の前へ立つて、畫中
の人物が畫面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見る
のと同じ譯になる。間三尺も隔てゝ居れば落ち付いて
見られる。あぶな氣なしに見られる。言を換へて云へ

ば、利害に氣を奪はれないから、全力を擧げて彼等の動作を藝術の方面から觀察する事が出来る。餘念もなく美か美でないかと鑑識する事が出来る。

こゝ迄決心をした時、空があやしくなつて來た。貴え切れない雲が、頭の上へ靠垂れ懸つて居たと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しとくと春の雨が降り出した。

菜の花は疾くに通リ過して、今は山と山の間を行くのだが、雨の糸が濃かで殆んど霧を欺く位だから、隔たりはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹き拂ふとき、薄黒い山の脊が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔て、向ふが脉の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよく／＼顔を出す。出すかと思ふと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外廣くなつて、且つ平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぼたり／＼と落つる頃、五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の様に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

糠の様に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は一筋毎に風に捲かれる様迄が目に入る。羽織はとくに濡れ盡して肌膚に浸み込んだ水が、身體の温度で生暖く感ぜられる。氣持がわるいから、帽を傾けて、すた／＼歩行く。

茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀筋が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人

の姿と思へば、詩にもなる、句にも咏よまれる。有ありてい體な
る己おのれを忘れ盡つくして純客觀に眼をつくる時、始めてわ
れは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保たも
つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に
掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡
の人にもあらず。依然として市井しせいの一豎子じゆしに過ぎぬ。
雲烟飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情なさけも心に浮うか
ばぬ。蕭々せうくとして獨り春山しゆんざんを行く吾の、いかに美しき
かは猶更なほさらに解かいせぬ。初めは帽を傾かたむけて歩行あるいた。後には
唯足ただの甲かふのみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼ
めて、恐るゝ歩行あるいた。雨は滿目まんもくの樹梢じゆせうを揺うごかして四
方はうより孤客こかくに逼せまる。非人情がちと強過ぎた様だ。

二

「おい」と聲を掛けたが返事がない。
軒下のきしたから奥を覗くと、煤すすけた障子が立て切つてある。

向ふ側は見えない。五六足の草鞋わらぢが淋さびしさうに庇ひさしから
吊つるされて、屈托氣くつたけにふらりと揺ゆれる。下に駄菓子
の箱が三つ許ばかり並んで、そばに五厘錢ごりんせんと文久錢ぶんきうせんが散ら
ばつて居る。

「おい」と又また聲をかける。土間の隅に片寄せてある
臼の上に、ふくれて居た鶏にはとりが、驚ろいて眼をさます。
ク、ク、ク、と騒ぎ出す。敷居の外に土竈どづつひが、今し
がたの雨に濡れて、半分程色ほどが變つてゐる上に、眞黒な
茶釜ちやがまがかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわから
ない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷むだんでずつと這入はいつて、床几しやうぎの上
へ腰を卸おろした。鶏は羽搏はばたきをして臼から飛び下りる。
今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ奥迄
馳かけぬける氣かも知れない。雄をすが太い聲でこけつこつ
こと云ふと、雌めすが細い聲でけつこつこと云ふ。丸で
余よを狐いぬか狗いぬの様に考へてゐるらしい。床几しやうぎの上には一